

中国における日中戦争の捉え方

——大陸と台湾の歴史展示の比較を踏まえて——

大東文化大学 鹿錫俊

中国では「歴史認識問題」は「日本軍国主義が中国を侵略した歴史をいかに認識し対処するか」と定義され、且つ、実質的には日本だけにその問題があるとされるのが一般的である。しかし、中国自身がこのような歴史を如何に認識し対応しているのかという点も、ここでいう歴史認識問題の一側面として究明しなければならない課題であると思われる。

本報告はこの課題の解明を試みるために、2部に分けて論説を展開したい。

第1部では、1949年の中華人民共和国建国から2015年の「抗日戦争勝利70周年」記念に至る間、中国における日中戦争史（＝抗日戦争史）の扱われ方の変遷過程を追跡し、以下の特徴を論じる。

(1) 「毛沢東時代」の30年間は「歴史」とは革命史のことであり、抗日戦争史はあまり重視されていなかったうえ、史実への対応は政治に左右されていた。

(2) 革命史中心から愛国主義高揚への過渡期に当たる1978—1989年間には抗日戦争史が重視され始めたが、それは日本の歴史修正主義の動きへの反撃という性格を持つ「受け身型」と対台湾統一工作の必要に基づく「国内政治重視型」の表われであった。

(3) 1989年から今日に至る愛国主義高揚の時代では、抗日戦争史に対する中国の重視度は高まる一方であった。その原因は複雑であるが、日本への反撃とともに、中国の日本観と日中関係観の変化、大国化に伴う対外政策の変化および国内政治への配慮が重要である。

続いて、第2部では、報告者が2015年に行なった現地調査に基づいて、「抗日戦争勝利70周年」を記念するための中国大陸の歴史展示と台湾側の歴史展示を比較したうえで、日中戦争の捉え方をめぐる双方の対立点を究明しつつ、その背景および中国への影響と日本への示唆を分析する。

[附記：本報告は、大東文化大学特別研究費「日中関係史をめぐる中国の記念施設の内実——縦の比較と横の比較を総合する学術的考察」による成果の一部である。]